



学説彙纂第30 卷邦訳(1)

瀧澤, 栄治
後藤, 弘州

(Citation)

神戸法學雑誌, 68(2):335-349

(Issue Date)

2018-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010597>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010597>



神戸法学雑誌第六十八巻第二号二〇一八年九月

学説彙纂第30巻邦訳 (1)

瀧澤 栄 治

後藤 弘 州

第30巻 遺贈及び信託遺贈について

De legatis et fideicommissis

第1法文 ウルピアーヌス『告示註解』第67巻

遺贈はすべての点において信託遺贈と同じものとされた。

ULPIANUS libro sexagesimo septimo ad edictum Per omnia exaequata sunt legata fideicommissis.

第2法文 同『信託遺贈』第1巻

遺言を作成する権利を有する者のみが信託遺贈を残すことができることを、知っておく必要がある。

IDEM libro primo fideicommissorum Sciendum est eos demum fideicommissum posse relinquere, qui testandi ius habent.

第3法文 同『サビーヌス註解』第4巻

遺言者が、「上述した人の中、誰が私の相続人となろうとも」または「もしセイウスが相続人となるならば」または「もし彼が相続を承継するならば」と書いたとしても、それに付された遺贈または信託遺贈が条件付きとなるわけで

はない。

IDEM libro quarto ad Sabinum Haec verba testatoris: “quisquis mihi ex supra scriptis heres erit” aut “si heres erit Seius” vel “si hereditatem adierit” subiectum legatum vel fideicommissum non faciunt condicionale.

第4法文 同『サビーヌス註解』第5巻

土地の名称について錯誤し、センプロニウスではなく、コルネリウスの土地と言った場合、センプロニウスの土地が遺贈の目的物となる。しかし客体について錯誤に陥った場合、遺贈義務は発生しない。「衣服」を遺贈しようとする人が、「衣服」もまた「家具」の名称に含まれると考えたので、「家具」と表示した場合、ポンポーニウスが書いたように、「衣服」については遺贈義務が発生しない。これは、「金」の名称によって「琥珀金」または「真鍮」を含むと考えた、またはよりおろかなことに、「銀」が「衣服」の名称に含まれると考えた場合と同様である。なぜなら、物の名称は変えられないが、人の名称は変わり得るからである。

IDEM libro quinto ad Sabinum Si quis in fundi vocabulo erravit et Cornelianum pro Semproniano nominavit, debebitur Sempronianus: sed si in corpore erravit, non debebitur. quod si quis, cum vellet vestem legare, suppellectilem adscripsit, dum putat suppellectilis appellatione vestem contineri, Pomponius scripsit vestem non deberi, quemadmodum si quis putet auri appellatione electrum vel aurichalcum contineri vel, quod est stultius, vestis appellatione etiam argentum contineri. rerum enim vocabula immutabilia sunt, hominum mutabilia.

1. ある人が複数の相続人を指定し、以下のように遺贈した。「誰であれガリアにおける私の財産の相続人となった者は、〔ある者に遺贈を〕与える義務を負え」。この場合、相続人全員がその遺贈義務を負う。なぜなら、ガリアの財産は相続人全員に帰属するからである。

1. Si quis heredes instituerit et ita legaverit: “quisquis mihi Gallicanarum rerum heres erit, damnas esto dare”, ab omnibus heredibus videri legatum, quoniam ad omnes eos res Gallicanae pertinent.

第5法文 パウルス『サビーヌス註解』第1巻

奴隷を選択する権利が遺贈された場合、一度限りで選択することができる。

PAULUS libro primo ad Sabinum Servi electione legata semel dumtaxat optare possumus.

1. ラベオーは言う。特定の物または人が、「私の死亡時に私のものであろう〔奴隷を〕相続人は与えよ」というように遺贈されたところ、遺贈の目的物が共有状態にあった場合、目的物全部が遺贈義務の対象になる、と。それに対してトレバティウスは共有持分のみが遺贈義務の対象になると解答した、とカッシウスは書いている。こちらが正当である。

1. Labeo ait, cum certa res aut persona legatur ita: “qui meus erit cum moriar, heres dato” et communis sit, totum deberi. Trebatium vero respondisse partem deberi Cassius scripsit, quod et verius est.

2. 共有の土地が遺贈されたが、〔被相続人は〕共有持分に言及せずに「私の〔土地〕」と言った場合、共有持分のみが遺贈義務の対象となることが確定している。

2. Cum fundus communis legatus sit non adiecta portione, sed “meum” nominaverit, portionem deberi constat.

第6法文 ユーリアーヌス『法学大全』第33巻

「私の死亡時に私のものであろうスティクスを、私の相続人は与えよ」。〔このように遺贈がなされた場合、〕家長は〔単に〕奴隷と言うつもりだったのでなく、遺贈に条件を付けようとしたのである。このことは以下のことから明らかである。すなわち、もしそういうつもりで文言が書かれたとしたならば、「私のものであろうスティクス」ではなく「私のものであるスティクス」と表記されたはずだからである。そして条件は「私のものである限り」と理解されなければならない、目的物が全部譲渡された場合、遺贈は無効となる。また目的物の一部が譲渡された場合には、死亡時点になお遺言者が有する持分が、遺贈義務の対象となる。

IULIANUS libro trigesimo tertio digestorum “Stichum, qui meus erit cum moriar, heres meus dato”: magis condicionem legato iniecisce quam demonstrare voluisse patrem familias apparet eo quod, si demonstrandi causa haec oratio poneretur, ita concepta esset “Stichus qui meus est”, non “qui meus erit”. sed condicio talis accipi debet “quatenus meus erit”, ut, si totum alienaverit, legatum exstinguatur, si partem, pro ea parte debeatur, quae testatoris mortis tempore fuerit.

第7法文 パウルス『サビーヌス註解』第2巻

奴隷の主人は、奴隷に帰属した遺贈を放棄することができる。

PAULUS libro secundo ad Sabinum Legatum servo delatum dominus potest repudiare.

第8法文 ポンポニーウス『サビーヌス註解』第2巻

遺言者が、遺贈した土地の中の一部を〔その後〕譲渡した場合、残りの部分だけが遺贈義務の対象となると考えられる。なぜなら、彼がその土地を一部拡張した場合にも、増加部分は受遺者に帰属するからである。

POMPONIUS libro secundo ad Sabinum Si ex toto fundo legato testator partem alienasset, reliquam dumtaxat partem deberi placet, quia etiam si adiecisset aliquid ei fundo, augmentum legatario cederet.

1. 「私の相続人ルキウス・ティティウスまたは私の相続人マエウィウスは、10をセイウスに与えよ」と、遺贈がなされた場合、セイウスは二人の中のどちらでも好きな方を訴えることができ、一方が支払ったときには、他方は義務を免れる。あたかも問答契約による二人の連帯債務者が、全部について責任を負う場合と同じに扱われるのである。では、セイウスが一部について訴えた場合はどうなるか。セイウスはもう片方に残りを訴求することが許される。一方が〔自ら〕一部を支払った場合も同じことが妥当する。

1. Si ita scriptum sit: “Lucius Titius heres meus aut Maevius heres meus decem Seio dato”, cum utro velit, Seius aget, ut, si cum uno actum sit et solitum, alter liberetur, quasi si duo rei promittendi in solidum obligati fuissent. quid ergo si ab

altero partem petierit? liberum cui erit ab alterutro reliquum petere. idem erit et si alter partem solvisset.

2. 「八人の輿を担ぐ奴隸、またはそれらの奴隸に代えて奴隸一人につき定額の金銭、どちらか受遺者が望む方を」と、遺贈がなされた場合、受遺者は、〔一方で〕奴隸の一部を所有物取戻訴権で請求し、〔他方で〕金銭の一部を訴求することはできない。なぜなら50ポンドの油、または1ポンドにつき定額の金銭をと遺贈された場合と同様に、いずれの場合においてもそれぞれで一つの遺贈がなされているからである。なぜなら、もしそれと異なる理解をしたならば、一人の奴隸〔、またはそれに代えて定額の金銭が〕遺贈された場合であっても、分割が許されてしまうからである。金額が分割的に〔一人につきいくらと〕書かれている場合と、まとめて定額の金銭が書かれている場合とで違いはない。そして、八人の奴隸、または全員について定額の金銭を、と遺贈がなされた場合に、相続人が自己の意思に反して、部分的に金銭を、そして部分的に奴隸を給付する義務を負わないことは確かである。

2. Si ita legatum sit: “lecticarios octo aut pro his in homines singulos certam pecuniam, utrum legatarius volet”, non potest legatarius partem servorum vindicare, pro parte nummos petere, quia unum in alterutra causa legatum sit, quemadmodum si olei pondo quinquaginta aut in singulas libras certum aes legatum sit: ne aliter observantibus etiam uno homine legato divisio concedatur. nec interest, divisa ea summa an iuncta ponatur: et certe octo servis aut pro omnibus certa pecunia legata non posse invitum heredem partem pecuniae, partem mancipiorum debere.

第9法文 同『サビーヌス註解』第3巻

敵のもとに〔捕虜として〕いる人に対しても遺贈をなすことができ、帰国権に基づき、遺贈は存続するとオクタウェヌスは書いている。

IDEM libro tertio ad Sabinum Id quod apud hostes est legari posse Octavenus scripsit et postliminii iure consistere.

第10法文 パウルス『サビーンヌス註解』第2巻

〔選択権が遺贈された場合、〕家息は家長の命令なしに選択権を行使することができないし、選択権の行使を相続の承継前にもなすことができない、とユーリアヌスは考える。このことは正しい。

PAULUS libro secundo ad Sabinum Iulianus nec a filio familias sine iussu patris optari posse nec ante aditam hereditatem putat, quod est verum.

第11法文 パーピニアヌス『質疑録』第9巻

〔他人の〕家息または他人の奴隷に遺贈または相続財産が与えられた場合、その家父またはその主人に対して信託遺贈の義務を負わすことができる。しかし、その人を通じて家父または主人が利益を得るところの人自身〔すなわち家息または奴隷〕が信託遺贈受遺者である場合に限っては、家父自身または主人自身として信託遺贈の義務を負う⁽¹⁾。さらに〔他人によって〕自己の家息を相続人に指定され〔そして信託遺贈の負担を負わされる〕家父は、たしかに家外人に対しては家息として信託遺贈義務を負うので、家父が家外人に相続財産を交付する際にはファルキディウス法の四分の一分について考慮されるが、家息自身との関係ではファルキディウス法の四分の一分の考慮はなく、このことは家息自身が自分に対して義務を負うことはできず、家父は相続人〔たる家息〕としてではなく、父自身として信託遺贈により依頼されたのだと考えられるからである、とユーリアヌスは非常に鋭い検討をもとに解答した⁽²⁾。そして、

-
- (1) すなわち、信託遺贈受遺者が家息または奴隷以外の者である場合には、家父または主人は、家息または奴隷として信託遺贈の義務を負う。
 - (2) ファルキディウス法は遺贈に対する制限法であり、ペガサス元老院議決によって信託遺贈の場合にも適用される。そしてファルキディウス法により過度な遺贈から保護されるのは、「相続人」である。信託遺贈受遺者が家外人である場合には、家父は「相続人」である家息として信託遺贈の義務を負うので、ファルキディウス法による保護を受けることができる。しかし信託遺贈受遺者が家息である場合には、家父は相続人たる家息としてではなく、「父」自身として、家息に対して信託遺贈の負担を負っているので、家父は「相続人」に対する保護規定であるファルキディウス法により保護されない、とここでは考えられて

遺贈によりまたは相続財産から家息に残されることによって、自身〔家父〕に帰属するところのものを、家父がその家息に対して家父の死後に引き渡すことを、家父が信託遺贈により頼まれ、家父の生存中にその家息が死んだ場合であっても、いずれにせよ家父は家息に引き渡すよう頼まれたものを保持することができる。なぜなら信託遺贈は、家父が家父として遺贈義務を負うという内容で効力を有したからである、と。⁽³⁾

PAPINIANUS libro nono quaestionum Cum filio familias vel servo alieno legatum vel hereditas datur, fidei committi patris vel domini potest ac tunc demum ex persona ipsorum fideicommissum vires capit, cum ipsis, per quos commodum hereditatis vel legati patri dominove quaeritur, fideicommissum relinquitur. denique Iulianus non insuptili ratione motus patrem, cuius filius heres institutus est, extero quidem habita ratione legis Falcidia restituere hereditatem respondit, quoniam ex persona filii teneretur, ipsi vero filio non admissa Falcidia, quoniam ex persona sua sibi filius obligare non posset ac pater non ut heres, sed ut pater rogari videtur. et ideo si filio rogatus sit pater post mortem suam, quod

いる。

- (3) 前述のペガスス元老院議決は、アウグストゥス帝による婚姻奨励法を信託遺贈にも適用する。この婚姻奨励法は婚姻していない者、無子者の相続財産取得について制限を設けるとともに、受遺者が遺贈の権利発生前に死亡した場合などに、その人に対してなされた遺贈が顛落し、有子者たちに帰属することを定める。この法がペガスス元老院議決を通じて信託遺贈にも適用されると、本法文の事例において、家父が信託遺贈を保持できない可能性が生じる。しかし家父は相続人たる家子としてではなく、相続人ではない家父として信託遺贈の義務を負っているため、相続人に対する保護を目的とするペガスス元老院議決は適用されず、その結果婚姻奨励法の適用もないことから家父は信託遺贈を保持することができる、とここでは考えられている。参考文献 U.Manthe, “Testierfreiheit und lex Papia: Papinian 19 quaestionum D. 30.11”, *Libertas: grundrechtliche und rechtsstaatliche Gewährungen in Antike und Gegenwart: Symposium aus Anlaß des 80.Geburtstages von Franz Wieacker, Ebelsbach, 1991*, S. 113-138.

ad se pervenit ex legato vel hereditate filio relictis, restituere isque vivo patre decedat, omnimodo patrem id retenturum, quoniam fideicommissum ex persona patris vires acceperit.

第12法文 ポンポニーウス『サビーヌス註解』第3巻

ラベオーは次のように述べている。私とあなたに同じものが遺贈されたが、その後、遺贈の権利発生日に私があなたの相続人になった場合、遺贈された物を私の遺贈として得るかまたはあなたの相続人となったことによって得るかを、私は自由に選ぶことができる、そして私が、私の遺贈として私に属することにしたときは、すべてが私のものとなるように、相続した遺贈を原因として請求することもできる。

POMPONIIUS libro tertio ad Sabinum Si mihi et tibi eadem res legata fuerit, deinde die legati cedente heres tibi exstitero, liberum mihi esse Labeo ait, ex meo legato an ex eo, quod tibi heres sim, adquiram legatum: si voluero, eam rem ex meo legato ad me pertinere, ut tota mea sit, ex hereditario legato petere eam posse.

1. プロクルスは以下のように述べる。ある人がローマにおいて死の床に臥せている時に作成した遺言において、ガーデース〔現スペインの都市 Cádiz〕で所有する奴隷を、自己の死後三日以内に私に与え遺贈する義務を相続人に課した場合、遺贈は有効であり、期間が短いことによって遺言が無効となることはない、と。

1. Proculus ait, si quis servos quos Gadibus haberet eo testamento, quod Romae moriens fecerit, triduo quo mortuus fuerit heredem dare mihi damnaverit, ratum esse legatum et angustias temporis nihil legato nocere.

2. その人自身に遺贈することができるのであれば、我々はその人の奴隷にも遺贈することができるとする、市民法準則が存在する。

2. Regula iuris civilis est, quae efficit, ut quibus ipsis legare possumus, eorum quoque servis legare possumus.

3. 遺贈においては一番最後に書かれたことが効力を有する。なぜなら、先に

書かれた遺贈の内容は、期限、条件を付加することによって、また、すべて撤回することによって変更することが可能だからである。しかし、ある条件を付けて遺贈が撤回され、また別の条件で撤回されたときは、最後の撤回に注目しなければならない。ところが遺贈においては、後に書いたことではなく前に書いたことが効力を有する場合が、ときおり存在する。というのは「以下でティティウスに遺贈するところものを、私は与えも、遺贈もしない」と書いた場合、以下でなされた遺贈は効力を有しないからである。なぜなら、即座に効力が発生する遺贈を後の期日に延期すると述べたことは、後に書かれた遺贈にも適用されるということが一般的に認められているからである。すなわち、遺言中に書かれたことが効力を有するのは、〔遺言者の〕意思の故である。

3. In legatis novissimae scripturae valent, quia mutari causa praecedentis legati vel die vel condicione vel in totum ademptione potest. sed si sub alia et alia condicione legatum ademptum est, novissima ademptio spectanda est. interdum tamen in legatis non posterior, sed praecedens scriptura valet: nam si ita scripsero: “quod Titio infra legavero, id neque do neque lego”, quod infra legatum erit, non valebit. nam et eum sermonem, quo praesentia legata data in diem proferuntur, ad postea quoque scripta legata pertinere placuit. voluntas ergo facit, quod in testamento scriptum valeat.

第13法文 同『サビーヌス註解』第4巻〔第5巻〕

特定することなく奴隷があなたに遺贈されたときに、相続人はスティクスをあなたの奴隷に引き渡した。〔この場合について〕ネラティウスは以下の解答を与えている。相続人がその主人〔＝あなた〕の意思によって引き渡したか、またはこれについて主人が追認した場合には、相続人は、スティクスが遺贈されたかのように、その義務を免れる、と。

IDEM libro quarto ad Sabinum Cum incertus homo legatus tibi esset, heres Stichum servo tuo tradidit. Neratius respondit, si voluntate domini tradidit vel ratum hoc dominus habuerit, perinde eum liberatum, atque si Stichus legatus esset.

第14法文 ウルピアーヌス『サビーヌス註解』第15巻

遺言中に以下のように付加された。「私がある人に対して二回遺贈した場合、相続人はその人に一度だけ与えよ」または「相続人は一度だけ遺贈義務を負うように」。そして遺言者が同じ人に、二つの定額の金銭または二つの土地の遺贈を書いた場合、両方ともが遺贈義務の対象となるのか。アリストーは一つの遺贈がなされたと考えられると言った。なぜならケルススとマルケッルスの見解に従い、撤回されたものは、与えられなかったものとして考えられるべきであるからである。この見解は正しい。

ULPIANUS libro quinto decimo ad Sabinum Si ita sit adscriptum: “si cui legavero bis, semel heres ei dato” vel “ut semel debeatur”, et eidem duas quantitates adscripserit vel duos fundos, an utrumque debeatur? et ait Aristo unum videri legatum: nam quod ademptum est, nec datum videri secundum Celsi et Marcelli sententiam, quae vera est.

1. しかしパーピニアースは『質疑録』第19巻において以下のように言う。たとえ複数回遺贈が書かれた後に、書いた人は一回のみ給付されることを望んで、まさにこのこと〔すなわち「私がある人に対して二回遺贈した場合、相続人はその人に一度だけ与えよ」または「相続人は一度だけ遺贈義務を負うように」という文言〕を付加し、その付加が遺言を作成し終わる前になされた場合、残りの遺贈は当然撤回される、と。しかしどの遺贈が撤回されるのか？つまりこのことが明らかではない。そしてより価値の低い遺贈が給付されなければならないということができると、パーピニアースは言う。

1. Sed Papinianus libro nono decimo quaestionum ait etsi post legata saepius adscripta idem hoc subiecit semel praestari velle et hoc ante impletum testamentum fecerit, ipso iure videri cetera legata adempta. sed quo magis erit ademptum? non enim apparet. et ait posse dici exiguius esse praestandum.

第15法文 パウルス『サビーヌス註解』第3巻

遺産の4分の1を遺贈することを欲した人が、2分の1と書いた。プロクルスは、4分の1は2分の1に含まれることを理由として、4分の1の遺贈の方を支

持することができる」と適切にも述べる。50を遺贈しようと欲した人が100と書いた場合も同様である。すなわち50が遺贈義務の対象とされる。しかしたとえ多く遺贈しようと欲し、少なく書いた場合であっても遺贈は有効である。

PAULUS libro tertio ad Sabinum Qui quartam partem bonorum legare voluit, dimidiam scripsit. Proculus recte ait posse defendi quartam legatam, quia inesset dimidia. idem erit et si quinquaginta voluit legare et centum scripta sint: quinquaginta enim debebuntur. sed et si plus legare voluit et minus scripsit, valebit legatum.

1. ある人が、後生子として生まれる娘のことも考えて、〔娘ではなく〕娘たちにある金額を遺贈した場合、その後生子が生まれなかったときは、今いる娘に対して全額の遺贈義務が発生する。

1. Si quis unam summam filiabus legaverit, ut etiam de postuma sentiret, si ea non est nata, superstiti solidum debebitur.

第16法文 ポンポニーウス『サビーヌス註解』第5巻

ある物が結合的に名を書かれた二人に遺贈された場合、たとえ片方の人が存在しなかったとしても、もう片方の人に対して、その人の持分についてのみ遺贈義務の発生することが正しいと私は考える。

POMPONIUS libro quinto ad Sabinum Si duobus res coniunctim legata sit, quamvis alter in rerum natura non fuerit, alteri solam partem deberi puto verum esse.

1. ある相続人が、相続人ではない別の人の名と列記されて遺贈を与える義務を負わされている場合、その相続人は遺贈全体について遺贈義務を負う。なぜならある人が自己の相続人の内の二人に名指しで遺贈義務を負わせ、そのうちの片方が相続を承継しなかった場合であっても、承継しなかった人の持分が承継した人に帰属するときには、承継した人が遺贈すべてについて義務を負うからである。

1. Heres adiecto ei nomine cuiusdam, qui heres non sit, dare damnatus totum legatum debet: nam et si duos ex heredibus suis nominatim quis damnasset et

alter hereditatem non adisset, qui adisset totum deberet, si pars eius qui non adisset ad eum qui adisset pervenerit.

2. ティティウスと後生子たちに遺贈が残された場合に、後生子が一人として生まれず、そのためティティウスが遺贈すべてを所有物取戻訴権により請求した。さらに、たとえ遺言者がティティウスと後生子たちにそれぞれの持分を与えることを望み、またはそれを明確に表明した場合であっても、後生子が一人として生まれなかったときは、遺贈全額についてティティウスを権利者として遺贈義務が発生する。

2. *Si Titio et postumis legatum sit, non nato postumo totum Titius vindicabit. sed et si testator Titio et postumis viriles partes dari voluisset vel etiam id expressisset, totum legatum Titio debetur non nato postumo.*

第17法文 ウルピアーヌス『サビーヌス註解』第15巻

娘たちに遺贈した人が、遺言の他の部分で後生子たる娘について言及していた場合、その人は娘たちに与えられる遺贈において、「[娘たち] という語に」後生子も「含む」という意図を有していたと考えられる。

ULPIANUS libro quinto decimo ad Sabinum Qui filiabus legavit, si mentionem aliqua parte testamenti postumae fecit, videtur in filiarum legato et de postuma sensisse.

1. 「私に娘が一人生まれた場合、私の相続人はその娘に100金を与えよ。」というようにある人が遺贈し、何人か生まれた場合、各々が同額〔100金〕を遺贈されると考えなければならない。ただし遺言者の反対意思が明白な場合は別である。

1. *Si quis ita legaverit: “si qua filia mihi genitur, ei heres meus centum dato”, pluribus natis videtur singulis tantundem legasse: quod ita accipiendum est, nisi evidens sit contraria sententia testatoris.*

2. 相続人の一人に遺贈がなされる場合、遺産分割訴権の場合の審判人の職務に基づき、遺贈義務は負わされることが明らかである。しかし、たとえ彼が相続を拒否した場合であっても、彼はこの遺贈を保持することができるということこ

とが確定している。

2. Si uni ex heredibus fuerit legatum, hoc deberi ei officio iudicis familiae herciscundae manifestum est: sed et si abstinuerit se hereditate, consequi eum hoc legatum posse constat.

第18法文 ユーリアーヌス『法学大全』第31巻

そしてさらに、自分自身の負担では自身に対して有効に遺贈されないといっても、彼は遺贈すべてを請求することができる。

IULIANUS libro trigesimo primo digestorum Et quidem totum legatum petere potest, quamvis a semet ipso inutiliter ei legatum fuisset.

第19法文 ウルピアーヌス『サビーヌス註解』第15巻

パーピニアースは『質疑録』において以下のように考える。無効になされた遺贈は遺贈の繰り返しによって、すなわち事後的に例えば「以上に加えて、私の相続人はその人に与えよ」というように小書付の作成において書かれたことによって、その有効性を確認される。「私が遺贈したがその履行日を付加しなかった金銭を、1年目2年目および3年目の日に〔分割して〕、私の相続人は与える義務を負え」というように小書付において事後的に書かれた場合は異なる結果となる。なぜなら遺言者は、無効になされたものを有効だと確認することを考えてこれをなしたのではなく、履行期日を延期するためにこれをなしたからである、と。

ULPIANUS libro quinto decimo ad Sabinum Legata inutiliter data Papinianus putat libro quaestionum confirmari per repetitionem, id est per hanc scripturam postea forte in codicillis factam: “hoc amplius ei heres meus dato”, et diversum esse in illa scriptura: “quas pecunias legavi, quibus dies adpositus non est, annua bima trima die heres meus dare damnas esto”: non enim hoc egisse testatorem, ut confirmaret quae inutilia sunt, sed ut diem utilibus prorogaret.

1. 同じ箇所では、パーピニアースは未成熟者補充指定についても書いている。もし未成熟者の負担で無効な遺贈が指定された場合、「以上に加えて」というように補充相続人の負担で遺贈が残され、未成熟者が父の相続人とならず

に死んだときには、補充相続人は遺贈義務を負う、と。

1. *Idem eodem loco et in substituto impuberis scripsit, ut, si fuerit ab impubere inutiliter legatum, substitutus hoc debeat, si “hoc amplius” legatum ab eo sit relictum aliquid nec ille patri heres exstiterit et decesserit.*

2. 諸持分について付加されることなく、複数人に対して遺贈がなされた場合、各々が等しい持分を受け取る。

2. *In legato pluribus relicto si partes adiectae non sunt, aequae servantur.*

第20法文 ポンポニーウス『サビーヌス註解』第5巻

二人の奴隷を有する人が、そのうちの一人を遺贈するときに、どちらを遺贈したかを分かる形ではなさなかった場合、受遺者が選択権を有する。

POMPONIUS libro quinto ad Sabinum Qui duos servos haberet, unum ex his legasset, ut non intellexeretur quem legasset, legatarii est electio.

第21法文 ウルピアーヌス『サビーヌス註解』第15巻

家畜の一群が遺贈された場合、後に増えた分も受遺者に帰属する。

ULPIANUS libro quinto decimo ad Sabinum Grege legato et quae postea accedunt ad legatarium pertinent.

第22法文 ポンポニーウス『サビーヌス註解』第5巻

家畜の一群が遺贈され、その中の家畜が遺言者の生存中に死に、他のものがその代わりに補充された場合、同じ一群であると考えられる。遺贈された一群から家畜が減り、例えば牛一頭しか残っていない場合、たとえもはや一群とは言えなくなってしまうとはいっても、その残った牛一頭を受遺者は所有物取戻訴権により請求できる。これは、借家として使われる集合住宅が遺贈されたが、それが焼失した場合に、受遺者が敷地を所有物取戻訴権により請求できることと同じである。

POMPONIUS libro quinto ad Sabinum Si grege legato aliqua pecora vivo testatore mortua essent in eorumque locum aliqua essent substituta, eundem gregem videri: et si deminutum ex eo grege pecus esset et vel unus bos superesset, eum vindicari posse, quamvis grex desisset esse: quemadmodum

insula legata, si combusta esset, area possit vindicari.

第23法文 パウルス『サビヌス註解』第3巻

ある人が財産の一部を遺贈した〔すなわち部分遺贈がなされた〕場合、今日認められているように、果実なしで引き渡されなければならない。ただし相続人の側に遅滞が存する場合は別である。

PAULUS libro tertio ad Sabinum Si quis bonorum partem legaverit, ut hodie fit, sine fructibus restituitur, nisi mora intercesserit heredis.